

「本能寺の変」と現代社会

歴史捜査家・明智憲三郎氏が講演

天正10年、今から434年前に明智光秀が京都の本能寺で謀反を起こして主君織田信長を襲撃し、信長は包囲されたのを悟ると寺に火を放ち自害して果てた。いわゆる本能寺の変が起きた6月2日、豊橋市内のホテルでは「本能寺の変の真実―?」について「歴史捜査家」の明智憲三郎氏が講演した。主催は、くらしビジネスサポートセンター(鈴木達也代表)。

(伊藤秀昭)

明智氏は明智光秀の子―於菴丸(おつまるまる)の血筋を引くこと伝えられ、本能寺の変の謎を科学的手法で解明し、20

13年12月『本能寺の変 431年目の真実』を出版。歴史

書としては異例とされる37万部を超えるベストセラーとなるなど講演や執筆活動を展開している。

それだけに、軍記物のように三面記事の史観で本能寺の変が、歴史学者によって歴史小説となり大河ドラマとなり、定説・常識となっていたことを憂い、史料を徹底して洗い出し、矛盾なく成立する確実性の高い歴史の真実として確立することの重要性を説いた。

本能寺の変についても「光秀は信長を恨んで殺したとする怨恨説や、天下が欲しかったとする野望説や、ひそかに謀反を企てたとする単独犯行説などがあるが、もしも失敗すれば一族が滅びるといふ謀反を決意する

には、逆に謀反しな

ければ明智一族が滅亡するという危機認識が必要であり、このことは日本史だけを見ていては解けない。日本の戦国時代の始まりは、世界では新しい領地を求めて大航海時代が始まっており、武田氏を滅亡させた信長は天下統一後に中国大陸に進出する予定であり、ここで明智一族を滅亡させる動きになる前に、この動きをどこかで止める必要があった」と力説する。

信長は「孫呉兵法」を学び、世界の情報を得るためにイエス会を重宝したのもそのためであるなど、示唆に富んだ論述は説得力があった。

また明智氏は利益至上主義に陥っている現代社会にも「極めて危険な方向に進んでいる。孫子の兵法やランチヤスター戦略に学んで、持続性のある社会に再構築すべきだ」と強調して、

話を終えた。この集いには信長の命日の供養を

終えたばかりの織田宗家末裔(まつえい)の織田信和氏親子も参加して、和やかに懇談会も行われた。

主催したくらしビジネスサポートセンターの代表である鈴木達也氏と両家は、4年前の7月の新城市での「決戦場まつり」の供養の時に知り合ったのがきっかけで、夢の交流が実現した。



●「孫子の兵法」十ヶ条の要諦

- ◆ 国が安泰であるための根本は、外交方針
 - ◆ 現代のビジネスにも活用される
- 孫子兵法の要諦は、戦い以前に勝てる準備を怠らぬ。戦わずして勝つのが兵法の本。戦もが勝てる準備を怠らぬ。地の利を知らぬが勝てぬ。天の時を知らぬが勝てぬ。人の心を知らぬが勝てぬ。作戦は常に自らに有利な方向に展開させるべきである。